

国際展サロンドトーヌへ馬の絵を出品 ～馬術を教え、馬を描く日々～

伯楽会 倉田タカユキ

馬に乗る立場から、馬の絵画を作りたい。生きた馬の息使いを感じられるような作品を。これは私が画家を志した20代のころ夢見た考えです。馬の躍動感、スピード、エネルギー、生命力。馬に乗ったからこそ、体感できた馬の魅力。そして今、マチスやピカソも出した、フランスの伝統的な展覧会サロンドトーヌに馬の絵を出品しています。10年続けての入選です。大学時代、絵の題材を求めて、馬術部に入部しました。そして、大学の授業として馬術を教え、中学、高校生に馬術を指導し、そして馬の絵を描いています。馬と絵画、一見相容れぬものようですが、どちらも芸術、私の中では一つにつながります。この講演では、馬術と絵画芸術を融合した、絵画作品について解説し、馬好きの画家の生活をお話します。

1 芸術活動について

1994年にフランスへ、2か月の旅。本物の絵画との出会い。

帰国後に個展開催。以後個展を中心に活動。個展は30回を数える。

フランスの伝統なる展示会サロンドトーヌ展への出展

国立新美術館で開催される日仏現代美術世界展でサロンドトーヌ賞受賞

2 伯楽会の結成 彫刻家西村修一さんとの出会い

こよなく馬を愛する画家による伯楽会を結成。馬事公苑、東京競馬場日本橋三越で展示会を開催

3 早稲田大学での馬との出会い

絵の題材を探して、馬術部へ。全日本学生馬術大会の障害と総合馬術への出場 森の中の障害を飛ぶ爽快感、躍動感、スピードを体感。同時に、馬とともに試合に臨み、ともに戦い、馬とともに勝利を分かち合うという馬術の魅力にひかれる。

早稲田大学で一般学生に授業として、馬術を教え、18年

早実の中学高校生の指導も担当

4 芸術とスポーツの融合した、新たな世界の構築を目指す

馬を乗る立場からすると、この絵の中の馬、生きていないな、と感じるときがある。奇麗だけど生きてない。おそらく、馬をさわっていないのでは、馬に騎乗した経験がないのでは、などなど。馬術は人と馬の織り成す芸術。その真髄を理解してこそ、馬の絵が成立する。今後も馬を描き、馬術を、そして馬の芸術としての絵画を広めていきたい。